

ファンタジーは
知らないけれど、
何やら規格外
みたいです

Fantasy ha shiranai keredo,
naniyara kikakugai
mitaidesu

神から貰ったお詫びギフトは、

無限に進化するチートスキルでした

5

渡琉兎

Ryuto Watari

Illustration

たく

主な登場人物

ダイン

腕利き冒険者パーティ
「瞬光」のリーダー。
面倒見がよく、
剣の腕も抜群。

リタ

「瞬光」に新たに
加入した魔導師。
回復魔法と強化魔法が
大得意。

フェリ

商業ギルドにおける、
トーヤの同僚。
明るい性格で、
お客からの評価も
高い。

リリアーナ

商業ギルドのサブマスター。
仕事ができ
気配りも忘れない、
頼れるお姉さん。

ヴァッシュ

足の速さが自慢の狼獣人。
「瞬光」では
斥候役を務める。
口は悪いが、
親切で優しい。

ミリカ

誰に対してもフレンドリーな
「瞬光」のムードメーカー。
ヴァッシュとは
犬猿の仲……!?

レミ

アリアナの助手を
している少女。
常識人な
しっかり者。

アリアナ

魔導具を愛する
凄ウデ研究者。
王都を飛び出て
商業ギルドに身を
寄せている。

トーヤ

本作の主人公。
穏やかな性格で、
どんな時でも礼儀正しい。
ファンタジー知識ゼロで
転生したが、
その身に宿すスキルは
規格外!?

アグリ

トーヤにできた
初めての友達。
普段は元気いっぱいだが
弱気な一面も。

◆◆◆第一章…トーヤ、魔導具を提案する◆◆◆

日本で社畜^{しゃちく}として過^すごしていた男性——佐鳥^{さとり}冬夜^{とうや}は子供を助けるため、トラックに轢^ひかれて死んでしまった。

しかし、その死は女神のミスから起きた不幸な事故^{じこ}だったため、冬夜は女神が管理する異世界——スフィアイズへの転生を約束される。

その際、お詫^わびとしてスキルを与えられ、ファンタジーに関する知識がほとんどない冬夜は、「楽をして何かを成^なすことになんの意味があるのか」と言い、初級^{しゅきゅう}の鑑定^{かんてい}系スキルである『鑑定^{かんてい}眼^{がん}』が欲しいと主張した。

スフィアイズでの名前を『トーヤ』とし、彼は冒険者パーティの『瞬光^{しゅんこう}』や、商業ギルドのギルドマスターであるジェンナ、頼れる先輩のフェリやリリアーナに助けられ、商業ギルドで社畜らしく仕事をこなしていく。

また、祖父に似た印象のある、なんでも屋の主人ブロンや、フェリの弟であり、同年代でもあるアグリと出会い、どんどんスフィアイズでの生活を充実させていく。

またかつて訪れた王都でも良縁に恵まれ、魔導具師のアリアナとレミが商業ギルドで働くようになり、どんどんと周りが賑やかに なっていった。

そんな中、トーヤが最高品質のポジションを調査したことで周りが騒がしくなり、新たに会ったDランク冒険者のミラ、新人冒険者のギルと騒動に巻き込まれてしまう。

大商会の嫡男が暗躍しギルを誘拐したものの、トーヤは瞬光やジェンナ、アリアナやレミの力も借りて、ギルの救出に成功した。

ギルとは新たな友達として仲を深め、トーヤの日常はより賑やかに、楽しいものに移り変わっていったのだった。



トーヤの朝はとても早い。

今日も一人で目を覚ますと、そのまま階段を下りていく。

だがこれは彼の日課であり、本人からすれば特に早いとは感じていなかった。

「おはようございます、ブロンさん」

トーヤはリビングに下りると、なんでも屋の店主であるブロンに挨拶した。

現在、トーヤはブロンの家に居候するという形で一緒に暮らしている。

「おはよう、トーヤ」

トーヤと同じくらいに朝が早いブロンは、穏やかな様子で返事をする。

「アリアナさんとレミさんは、まだ寝ているのでしょうか？」

「昨日の夜も帰りが遅かったからね。ゆっくりさせてあげた方がいいんじゃないかな」

ブロンの家には、トーヤと同じでアリアナとレミもお世話になっている。

どうせなら大勢の方が家も賑やかになるというブロンの言葉がきっかけで、四人で生活を共にしているのだ。

「それもそうですが……後ほど、ジェンナ様に報告しておいた方が良さそうですね」

トーヤやアリアナ、レミが働いている商業ギルドでは、ギルドマスターであるジェンナの方針で、残業は良くないとされている。

当然と言えば当然なのだが、それを当然と思わない組織は多い。

特に前世が日本人で社畜だったトーヤからすれば、商業ギルドの体制は非常にありがたいものであり、今後も続けてほしいと思っている。

故に、アリアナとレミが残業しているということは、ジェンナに報告しなければならないと判断した。

「そうなれば、アリアナもレミも遅くまで残ることはなくなるだろうね」
ブロン言葉にトーヤは頷く。

「その通りです」

アリアナとレミは商業ギルド、そこに新設された魔導具開発部に所属している。

魔導具が大好きで、毎日のように魔導具のことを考えている二人だが、それもやり過ぎは良くないとトーヤは考える。

トーヤから言ってもおそらくは聞いてくれないので、ジェンナから言ってもらえば万事解決すると判断していた。

そんなことを考えながら、ブロンが用意してくれた朝食に舌鼓^{したつみ}を打ち、アリアナとレミが起きてくるよりも早くにトーヤは家を出た。

ブロンの家から商業ギルドまでの道のりは、トーヤにとっては既に通い慣れた道になっている。

「今日も早いわね、トーヤ君！」

「トーヤじゃねえか！ おはようさん！」

「おはようございます」

道行く人から声を掛けられ、挨拶を返すトーヤ。

こんな日々がこれからも続くのだと、心が穏やかになりながら道を進む。

そうして到着した商業ギルドでは、今日もトーヤより早く出勤している人が一人だけいた。

「おはようございます、ジェンナ様」

商業ギルドの扉^{かど}を潜り挨拶をすると、掃除をしていたジェンナが顔を上げてくれる。

「おはよう、トーヤ」

「手伝います」

「助かるわ」

ジェンナとのやり取りも、トーヤからすればお決まりになってきている。

一緒になって掃除をし、それから軽い雑談をしながら、他の職員の出勤を待つのだ。
手を動かしながら、トーヤはアリアナとレミのことで、ジェンナに声を掛ける。

「ジェンナ様。アリアナさんとレミさん、昨日も遅くまで魔導具開発部にいたようなのです」

「あら、そうなの？ 戸締りをする職員のことも考えてほしいわね」

「ジェンナ様から言ってもらった方が早いと思うので、お願いしてもよろしいでしょうか？」

「もちろん、構わないわ」

アリアナとレミの知らないところで、二人がジェンナに怒鳴られることが決めた瞬間だった。
それからしばらくすると、一人、また一人と職員が出勤してくる。

ギリギリまで寝ていたのだろう、アリアナとレミは出勤時間間際になってようやく姿を現した。

それから朝礼が始まり、本格的に仕事が始まる。

「アリアナとレミはちよつと来てくれるかしら？」

「え？」

すると、朝礼が終わってすぐにジェンナから二人に声が掛かり、アリアナとレミは困惑顔だ。

三人で魔導具開発部に姿を消してしまつたが、おそらく懇々こんこんと怒られるのだらうと思つたトーヤは、その表情を自然と苦笑させていた。

商業ギルドの営業が始まつてから三時間ほどが経つと、隣で仕事をしていたフェリがポツリと呟つぶやく。

「今日は極端にお客さん少ないわね？」

「何か事情がある、というわけでもないですよね？」

フェリの呟きを耳にしたトーヤが問い掛けた。

「今日は特に何かイベントごとがあるわけでもないし、普通の平日だったはずなのよね」

「確かに、それでしたら今日の客足は極端に少ないですね」

営業が始まつてから三時間ほどが経過し、トーヤが働く鑑定カウンターにやつてきた客は一人だけ。

他のカウンターも似たようなもので、このままでは無意味な時間だけが流れてしまうと、トーヤは内心で悩んでしまう。

すると、それを見透かしたようにフェリが尋ねる。

「……トーヤ君、仕事がしたいと思つてない？」

「おや？ どうしてお分りに？」

「やつぱりね。なんだか、トーヤ君の表情が分かるようになってきたかも」

そう口にしたフェリは苦笑したが、トーヤからすると考えていることが駄々漏れなわけで、少しだけ恥ずかしくなった。

「それじゃあ、アリアナさんとレミさんのところに行ってきたらどうかしら？」

そんなことを考えていると、フェリから予想外の提案をされる。

「ですが、いいのですか？ 仕事を抜けてしまつて」

「この状態だからね。それに、朝礼が終わってからあの二人、すぐに呼び出されていたでしょう？ なんだか心配になつちやつて」

その呼び出される原因を作つたのが自分なのでなんとも言えなかつたトーヤは、思わず苦笑いを浮かべた。

「もちろん、トーヤ君がゆつくりしたいなら、鑑定カウンターにいてくれても——」

「行ってきます！ 何かあれば声を掛けてください！」

フェリが言い終わる前に立ちあがったトーヤは、やや引きつった笑みでそう口にした。

「……そ、そう？ それなら良かった」

「あ……えっと、それでは、失礼いたします」

勢いよく言ってしまったと自覚したトーヤ。

恥ずかしそうにしながらそそくさと歩き出した。

向かった先は、商業ギルド内で魔導具開発部と命名されている一室だ。

——コンコン。

トーヤが扉をノックすると、中から足音が近づいてくる。

そして、開かれた扉の先に立っていたのは、魔導具開発部の一員であり、アリアナの助手ともいえるレミだった。

「トーヤさんじゃないですか！ どうしたんですか？」

「おはようございます、レミさん。実は、私にできることがないかを聞きに来たんです」

「できること、ですか？」

どうして今なんだろうと疑問に思ったレミだったが、トーヤの背後に見えた、ガランとした商業ギルドの状況を見て推測する。

「あ、もしかして、トーヤさんのところはお客さんが少ないから、私たちを手伝いにきてくれたんですか？」

「ええ、まあ……」

他にも様子を見にきたのだが、中々それは切り出せず、トーヤは曖昧に答えた。

しかし、レミは微妙な表情になる。

「お気持ちありがとうございますが……」

「おや？ どうしましたか？」

いつものレミならすぐに中へ入れてくれると思っていたため、どこか迷っている様子に首を傾げるトーヤ。

「……実は、朝礼の後すぐに、ジェンナ様から働きすぎだと釘^{くぎ}を刺されてしまいまして、それなのにトーヤさんに手伝ってもらってまで仕事をするととなると……」

すぐにその原因が自分であることにトーヤは気づく。

「な、なるほど。そういうことでしたか」

やや苦笑いになりながらトーヤはそう口にする、誤魔化^{ごまか}すように言葉を続ける。

「で、ですが、今は業務時間ですし、問題ないのではないですか？」

「確かにそうなんですけど……本当にいいんですか、トーヤさん？」

「もちろんです！ お手伝い、させてください！」

アリアナとレミに残業をしてほしくない一心でジェンナに報告したトーヤだったが、ここまで悩まれると申し訳なく思えてならない。

罪滅ぼしというわけではないが、トーヤは二人を手伝えるならと力強くそう言い切った。

「……分かりました。それでは、ありがとうございます。中へどうぞ」

「ありがとうございます。失礼いたします」

レミに促されて中に入ったトーヤは、部屋の奥で何やら作業をしているアリアナを見つけた。

「……だいぶ集中されていますね」

「こうなったアリアナさんは、どれだけ声を掛けても耳に届かないんですね」

トーヤの呟きに、レミが呆れたように嘆き節を口にした。

しかし、トーヤは微笑んで答える。

「ですが、そこがアリアナさんの良いところでもありますよね」

「……そうなんですよ」

レミも本気で呆れているわけではない。

トーヤに遠慮して呆れたように口にしただけだ。

だが、トーヤがアリアナの良いところを理解してくれていたのが嬉しく、笑顔で同意を示した。

「今のところはアリアナさんも集中されていますし、以前にお話していたことでも相談しませんか？」

「以前にというと……もしかして、作ってほしい魔導具についてでしょうか？」

以前トーヤはアリアナから、新たに作ってほしい魔導具があれば言っただけと言われており、そのアイデアをずっと考えていたのだ。

その話をしたトーヤだったが、魔導具という単語が出た途端、アリアナが勢いよく振り返り声を上げる。

「考えてくれたのかね、トーヤ少年！」

「うわあっ!」

トーヤとレミは驚きの声を上げてしまった。

「……もう！ アリアナさん！」

「ん？ どうしたんだい、レミちゃん？」

「いきなり大きな声を出さないでくださいよ！」

「そうかい？ いやー、魔導具のことになると、どうにも声が大きくなってしまふんだよ！」

まさか魔導具に触りながらでも、魔導具の話をされたらそちらにも顔を向けるとは思わず、トーヤは苦笑いしながら口を開く。

「あの、アリアナさん？ そちらの作業はよろしいのですか？」

「あとは微調整くらいだからね、問題はないさ！ それよりもトーヤ少年の考えた魔導具の方が気になるからね！ さあ、聞かせてくれないか！ さあ、さあ！」

作業の手を止めてしまったかと気になったトーヤだったが、アリアナは問題ないと言いつつ、大股で近づいてくる。

あまりに近くまで来そうな気配を感じたのか、すぐにレミが間に入って止めてくれた。

「近すぎますから、アリアナさん！」

「そうかい？ あはははは！ すまないねえ、トーヤ少年！」

「全く！ ……それで、どうしようか、トーヤさん？」

改めてレミが聞いてくれたので、トーヤは頷きながら答える。

「お二人が問題なければ、魔導具の提案をさせていただければと思います」

「はいきたー！」

「アリアナさん！」

「あは、あはは……」

アリアナのテンションについていけるかどうか、トーヤは少しだけ不安になってしまった。

しかし気を取り直して口を開く。

「まず提案したいのは、冷蔵庫や冷凍庫になります」

トーヤが彼女たちに作って欲しいと思っていたのは、身の回りの生活が豊かになるような、そんな魔導具だった。

地球での生活を思い出し、その中であれば便利、あったら助かる、そう考えた家電を参考に提案したのである。

トーヤとしてはこれらの道具は絶対に必要だと思つての発言だったのだが、提案を聞いたアリアナとレミは顔を見合わせると、首を傾げた。

その後、なんでもない様子でアリアナが答える。

「それ、もうあるわよ？」

「え？ そうなのですか？」

「はい。一般には普及していませんが、貴族家には普通にあると思います」

トーヤは、便利そうな前世のものの中で、ブロンの家にないものを思い浮かべていた。

しかし、それはあくまでブロンの家にないだけで、他の場所にはあるかもしれないという可能性を認識していなかった。

つまり、冷蔵庫や冷凍庫も、トーヤが知らないだけでこの世界には既にあるということだ。

しかし、その話を聞いて、トーヤは疑問に思ったことをアリアナに尋ねる。

「貴族家にはあるということは、逆に言えば一般に普及させるのは難しいのでしょうか？」

「そもそも、魔導具自体が高価なものだからね。コンロみたいな普及している魔導具も、当初は高価すぎて貴族家にしか出てなかったんだもの」

「いずれは冷蔵庫や冷凍庫もそうなるとは思いますが、まだまだ難しいかなと思います」

「そう、なのです……」

そう口にしたトーヤは、他にも自分の思い描いていたものが、実は既に存在しているのではないかと思ひ始める。

それでは提案したところで二人の時間を無駄にするだけで、もっと調査をしてからアイデアを出した方がいいんじゃないかとも考え始めていた。

すると、アリアナがトーヤを見つめる。

「他には、魔導具のアイデアはないかしら？」

「あるにはあるんですが、私が知らないだけで、既にあるものかもしれないのです……」

「あら？ それでも構わないわよ？」

魔導具の研究が大好きなアリアナの時間を奪ってはいけなと考えての発言だったのだが、当の本人からは構わないと言われてしまう。

「……いいのですか？」

「もちろんよ！ トーヤ少年が欲しいということは、他の一般人も欲しいってことだし、それなら開発じゃなくて改良に力を注ぎばいいだけの話でしょう？」

「その通りですよ、トーヤさん！ 冷蔵庫や冷凍庫も、一般に普及した方がいいってことですよね？」

「私はそう思います。お肉などの生ものの保存ができればお料理の幅が広がりますし、それはつまり、家庭の幸せにつながっていると思いますので」

新しい魔導具とまではいかなかったが、トーヤはトーヤなりの意見を口にしていく。

それを聞いたアリアナも納得顔で頷き、満足気な笑みを浮かべる。

「それ、いいわね！ 先日の食事で食べたトーヤ少年の料理も美味しかったし、ぜひとも改良したいものだよ！」

「そうですね！ あんなに美味しい料理、王都でも食べたことがなかったです！」

トーヤは以前、お世話になった人たちを集めて食事を開いたことがある。

食事会の場所がブロンの家だったこともあり、当然だがアリアナとレミも参加していた。

そんな二人の言葉を聞き、トーヤは思わず嬉しくなってしまう。

「……あ、ありがとうございます。ですが、普段から食べているではありませんか」

ブロンの家で暮らしている者同士、口にしている料理は同じだ。

基本的にはブロンが料理を作ってくれているが、時にはトーヤも手伝っている。

なので、トーヤの料理を食事会の時だけしか口にしていない、ということはなかった。

「それはそうなのだが、やはり大勢での食事はまた格別ではないか！」

「確かに！ 私、初めてあれだけ大勢で食事をした気がします！ 魔導具開発局では……まあ、仲間外れにされていたので」

苦笑しながらそう答えたレミを見て、トーヤは二人が魔導具開発局でどれだけ不遇な立場だったのかを思い出し、洗面^{じゅうめん}になってしまう。

そんなトーヤの表情を見たからか、レミとアリアナは笑みを浮かべる。

「ですが、今はとても幸せです」

「その通りだ！ ラクセーナに連れてきてくれて、本当に感謝しているよ、トーヤ少年！」

その言葉を聞いて安心したトーヤだったが、アリアナが思い出したように勢いよく話題を変える。

「そうだ！ 冷蔵庫や冷凍庫もそうだがね、トーヤ少年！ 聞いてみたいことがあったのだよ！」

「な、なんででしょうか！」

トーヤは少し困惑しつつ答えた。

「初対面の時に話していたものがあつただろう！」

「初対面の時ですか？ ……何かありましたでしょうか？」

記憶を遡^{さかのぼ}ったトーヤだったが、何かを口にした記憶に辿り着けず、首を傾げてしまう。

「私の研究室が五階にあると言った時だよ！ 自動で上にいけるものかどうか、言っていたではないか！」

「……あー！ 確かに言っていましたね！」

「それはどういうものなんだい？ あの発言だ、見たことがあるのだろうか！」

見たこともあるし、実際に使ったこともある。なんせエレベーターやエスカレーターを思い浮かべて口にしたのだから。

とはいえ、それは前世での経験であり、スフィアイズでの経験ではない。

どのように伝えればいいのか、トーヤはしばし思案してしまう。

「……二種類あるのですが、一つずつでよろしいでしょうか？」

「もちろんだとも！」

「そ、そんなものが本当にあるんですか？ それも、二種類も？」

興奮しているアリアナとは違い、レミは驚きの表情を浮かべている。

魔導具開発を生業にしている二人でも、自動で移動する箱や階段は見たことも、想像もできなかったのかもしれない。

「一つは上下に移動する小さな箱のようなもので、人間が五人くらいは入れるものです」

「人間が五人も入れて、上下に移動するだ!？」

「はい。それ用に上下の道筋は必要となりますが、それがあれば一気に五階まで移動できて楽だと、魔導具開発局にいた時は思っておりまして」

「も、もう一つはどのようなものですか、トーヤさん!」

エレベーターの説明をしたあとは、レミにも興奮した様子で次の説明を催促された。

「もう一つは上下に移動する階段、と言えぱいいでしょうか。段に足を乗せると自動で動き出して、一つ上の階に運んでくれるのです」

「なんですか、その夢のような階段は!」

「だが、それはもう魔導具とは言えないぞ! それはもう! それはもう……なんだろうね?」

そこまで口にしたアリアナが首を傾げると、トーヤとレミも同じように首を傾げる。

「……まあ、いったんその話は置いておくか」

「いいんですか!？」

ここでアリアナから横に置いておくと言われ、トーヤとレミは驚きの声を上げた。

「呼び方なんてどうでもいいからね! それに、それだけの規模のものだ。簡単に作れるものではないし、後回しになるものだから次の魔導具の話をしようじゃないか!」

アリアナから問われたため答えたが、現状ではそれほど大掛かりな魔導具を作るのは困難だとい

うことはトーヤも理解できる。

エレベーターやエスカレーターの開発は先送りにされ、ならばとトーヤは女性に喜ばれそうな家で勝負に出ることにした。

「それでしたら、女性が髪を乾かす時に使えるような魔導具なんかはありますでしょうか?」

「それはどのようなものなんだい、トーヤ少年!」

ここでもアリアナのハイテンションは止まらない。

トーヤは彼女のハイテンションがいつまで続くのかと、内心で気になり始めてしまったが、それよりもここはなんとか挽回したいと考え、魔導具の説明を始める。

「暖かい空気と冷たい空気を出すことができる、手持ちタイプの魔導具です」

「ほほう! それは見たことも、聞いたこともない魔導具だね!」

アリアナが嬉しそうに笑いながらそう答えた。

「でも、トーヤさん。暖かい空気はなんとなく分かるんですけど、冷たい空気を出す理由は何なんですか?」

「ふむ、確かにその疑問はあるね。髪を乾かす魔導具だろう? 冷たい空気が必要なのかい?」

レミの疑問にはアリアナも同意し、トーヤへ質問した。

「暖かい空気髪を乾かすのは当然ですが、冷たい空気を当てることで、セットした髪が崩れにく



くなるという効果があるようです」

前世で社畜として仕事をしていた頃、何度か寝癖が酷い状態で出勤したことがあった。

出勤してから適当に髪を濡らして整えようとしたことがあったが、上手いかなかった。

その時に同僚の女性から、懇々とドライヤーの大切さを説かれたことを思い出しながら説明していくトーヤ。

（あの時は、愛想^{あいそ}笑^{わら}いをしながら受け流していましたが、まさかこちらの世界で私自身がドライヤーの重要性を語ることになるとは、思いもしませんでしたね）

それからトーヤは、魔導具の耐久性^{たいきゅうせい}を高めるためにも、本体が熱くなるだけではダメなのだとアリアナとレミに説明していった。

「魔導具の耐久性を考えれば、冷たい空気を出すことで、本体の冷却効果もあるということか」

「それよりも私は、冷たい空気を使うことでセットした髪が崩れにくくなることに驚きました!」

「まあ、私も他の方から伺った情報なのですが……」

あまりにも二人が感心したように話をしているので、トーヤは自分の手柄ではないからか、少しだけ居心地が悪くなってしまう。

「しかし、我々はこの情報をトーヤ少年と出会わなければ、知ることがなかっただろう!」

「そうですよ! ありがとうございます、トーヤさん!」

しかし、アリアナとレミはトーヤのおかげだと声を上げたので、トーヤは最初こそ困惑したものの、最終的には納得し、笑みを浮かべた。

そして、アリアナとレミは真剣な表情で話を始める。

「となると、火属性と水属性、加えて風属性が必要になるということか」

「水でいいんですか？ 氷の方が良さそうでは？」

「確かにその方が一気に冷えるだろうが、寒すぎないかい？ 頭を冷やすというのは、子供の頃から何度も言われたことだからね」

自分が入る余地はなかったが、こうやって二人で意見を出し合うことで、より良い作品が生まれるのだと思い、トーヤは見守ることにした。

「女性が使うものですから、小型で軽い方がいいですよね？」

「むむ。となれば、魔法式まほうしきも細かくする必要が出てくるか。トーヤ少年、サイズ感的にはどれくらいなのか聞いてもいいかね？」

そこで突然トーヤに話を振られ、彼は慌てたように答える。

「え？ あ、そうですね……これくらいでしょうか？ あと、形はこんな感じで……」

トーヤは身振り手振りでドライヤーのサイズ感や形を伝えようと、アリアナは顎あごに手を当てながら何度も頷く。

「ふむ。それくらいで問題なければ、値段も抑えられそうだね」

「……あの。やはり小型化すると高価になってしまいませんか？」

アリアナの発言を受けて、トーヤはちよつとした興味から質問してみた。

「そうだね。素材ごとに刻める魔法式の限界が存在しているんだ。膨大な量ぼうたいりょうを刻もうと思えば、それなりにサイズも大きくなってしまう。頑丈がんじょうで魔法に適性のある素材を使えば小型化も可能なのだが、そういった素材に限って、高価なものが多いのだよ」

「属性に適した素材があつたりもしますから」

アリアナの説明に、レミが補足を付け足してくれた。

それを聞き、トーヤは過去に仕事の最中などに鑑定した素材の中に、魔法適性の高いものがあつたことを思い出す。

そういったものが魔導具にも使われているため、物によっては高価になるのかと納得する。

その間にもアリアナとレミは新しい魔導具についての話し合いを続けていく。

冷蔵庫と冷凍庫を提案した時は失敗したかと思つたが、最終的にはドライヤーで二人の魔導具師魂に火を点けられたようで、トーヤは内心でホツとする。

——コンコン。

するとここで、魔導具開発部の扉がノックされた。

「はーい！」

レミが返事をしながら扉を開くと、そこにはフェリが立っていた。

「ごめんね、レミさん」

フェリが謝ってきたので、トーヤは自分の仕事のこともかもしれないと思い答える。

「どうかしましたか、フェリ先輩？」

「ちよつと私では鑑定できない品があつてね。トーヤ君、お願いできるかな？」

「かしこまりました」

トーヤがすぐに返事をする、アリアナとレミへ向き直る。

「というわけなので、今日はこの辺りで失礼いたします」

「本日はありがとうございました、トーヤさん！」

「ああ、トーヤ少年！ この魔導具の名前は決まっているのかい？」

挨拶をしてから魔導具開発部をあとにしようとしたトーヤだったが、最後にアリアナからそんな言葉が掛けられた。

「ドライヤー、と言います」

「ドライヤーか。……分かったよ！ 今日はとても楽しかった！ また時間があれば、いつでも訪ねてくれたまえ！」

こうして魔導具開発部を出たトーヤは、鑑定カウンターでいつもの仕事をこなしたのだった。

その後の鑑定カウンターは混み合う時間に突入したこともあり、トーヤは営業終了まで忙しなく働いた。

アリアナとレミがどのように作業をしているのかも気になったが、本業を疎かにするわけにはいかない、鑑定に集中する。

そうして無事に営業時間が終了した。最後に書類をまとめたトーヤは、商業ギルドを出る前に魔導具開発部に立ち寄る。

部屋の前に向かうと、扉をノックした。

——コンコン。

「……返事がありませんね？」

扉を開いてもいいかと考えたが、女性しかない部屋に男性が勝手に入るのもどうかと思い、僅かに思案したあと、そのまま踵を返す。

魔導具開発に集中してノックに気づいていない可能性もあるが、それならば遅くなり過ぎない時間にリリアーナやジェンナが声を掛けるだろうと判断したのだ。

ドライヤーについて何かしら助言ができればとも考えたが、急ぎではない。

明日でもいいかと思ひながら、トーヤはそのまま商業ギルドをあとにした。

「……ドライバー、完成したらいいですね」

帰り道を歩きながら、トーヤはそんなことを呟いた。

もしも本当に、自分の助言から魔導具が完成したのなら、それはとても喜ばしいことだ。

それが一般にも普及するとなれば、なおのこと嬉しい。

異世界に与える変化は小さなものなのかもしれない。

しかし、自分が影響を与えるのであれば、それくらいがちょうどいいのかもしれないと感じ、

トーヤは自然と微笑んだ。

（私は私なりに、スフィアイズに貢献^{こうけん}するつもりでしょう。大きな変化でなくてもいいのですから）
スフィアイズに転生する時、トーヤは自分にスキルを授けてくれた女神から言われたことを思い出す。

『——新たな人生を謳歌^{おうか}していただければ、それで構わないのですわ』

トーヤは今日まで、本当に自由に生きてきたなど思い返す。

危ないこともあったが、それもトーヤが自ら選択したことなのだから、自由に生きた結果なのだと思います。

社畜時代を考えれば、自分で考えて行動するなんてこと、ほとんどなかった。

「……私は本当に、スフィアイズに転生できてよかったです」

そんなことを考えながら歩いていたら、トーヤはあつという間にブロンの家に着した。

「ただいま戻りました」

裏口から中に入り、声を掛ける。

すると、ブロンが答えてくれた。

「ああ、おかえり。今日はどうだったかな？」

「午前中はお客様も少なくて、魔導具開発部に顔を出していました」

そう伝えると、ブロンは興味深そうにトーヤを見つめた。

「何か面白い魔導具でも思いついたのかい？」

なんでも屋を経営しているブロンは、元々便利な道具に興味を持っている。

トーヤが魔導具開発部に顔を出したと聞いて、詳しい話を聞きたくなったのだ。

「最初は冷蔵庫や冷凍庫を一般に普及できないか、ということ話を話してきました」

「あれは高い魔導具だからね。まあ、魔導具はどれも高いけれど、その中でも特別だ」

冷蔵庫や冷凍庫についてはブロンも知っており、その値段を思い出し苦笑する。

しかし、トーヤは答える。

「ですが、冷蔵庫や冷凍庫があれば、お料理の幅が広がると思いませんか？」

「そうだが、なかなか一般への普及は難しいんじゃないかね」

「そうかもしれないが、アリアナさんとレミさんはやってみると言ってくれました」

「なんと、そうなのかい？」

「はい！ もしそうなれば、私からブロンさんへプレゼントさせてくださいね！」

ブロンにはお世話になりっぱなしだ。そしてこれまで、トーヤはここだと決めた時以外はほとんどお金を使用していない。

商業ギルドからの給料は貯まる一方で、どうせ使うならお世話になっている人のために使いたいと考えていた。

「いくら一般に普及できるようになったとしても、高いものは高いはずだ。そんな高価なもの、いだけないよ」

「何を仰いますか！ それならば、私が欲しいから買います！ それならば問題ないでしょう！」

「全く。トーヤは頑固だね」

ブロンなら断るだろうことも想定していたので、トーヤは断られた直後に言い返す。

そんな彼を見たブロンは苦笑しながらも、どこか嬉しそうに笑っている。

「まあ、そういうことならわしがとやかく言う必要はないかな」

「そうでしょうとも」

「その代わり、そうなったならわしからも何かプレゼントしなければならぬね」

「私からの感謝の気持ちですし、私の勝手で買うのですから、必要ありません！」

ブロンの言葉にトーヤが否定の言葉を口にした。

「ならば……わしも勝手に買ってしまえば、問題はないということだね」

そう言っていたはずっぽく笑うブロン。

「それは！ ……うーん、そうやってしまいますかぁ」

トーヤは腕組みをしながら考え込んでしまう。

こんなことまで真剣に考えているトーヤを見て、ブロンは思わず微笑んだ。

「さて、続きは夕食を食べながらにしようか。せっかくの料理が冷めてしまうからね」

「はっ！ 確かにその通りですね！」

ブロンの言葉を受けたトーヤは我に返り、すぐに手を洗ってから席に着く。

テーブルには既に料理が並べられており、ブロンも席に着くと、二人は料理を堪能した。



翌日、トーヤはいつも通りに出勤したのだが、そこでジェンナに声を掛けられた。

「トーヤ。あなたは今日、魔導具開発部で仕事をしてちょうだい」

出勤して早々のことだったため、何事かと困惑してしまう。

「えっと、鑑定カウンターは？」

「フェリに任せるわ。彼女で鑑定できないものがあれば、明日に回します」

「ですが、それなら私が鑑定カウンターに戻ればいいのでは？」

昨日の対応を思い出しトーヤは答えるが、ジェンナは呆れた様子だった。

「そうなのだけどね……おそろくだけれど、アリアナがあなたを手放さないわ」

「……アリアナさん、ですか？」

ここでアリアナの名前が出てくるとは思わず、トーヤはさらに困惑する。

「昨日の営業後、彼女を魔導具開発部から追い出すのが大変だったのよ」

「あー……それ、絶対に私のせいですよね？」

「何か話をしたのでしょうか？ その開発を急ぎたいのだと、レミが教えてくれたわ」

そう口にしたジェンナは、小さくため息を吐く。

「ですが、ジェンナ様が怒ってくださった当日ですよね？ まさか、その日にいきなり食い下がるとは……」

「そうなのよね。凄腕の魔導具師なのだろうけど、こだわりがものすごいわね。さすがのわたしも驚いたわ」

「なんと言いますか、申し訳ございませんでした」

アリアナとレミに残業をしないよう言っただけとお願ひしたのはトーヤだ。

だがトーヤの助言のせいで、二人は新しい魔導具を早く開発したいと考えてしまっている。

これでは本末転倒だと感じ、トーヤはすぐにジェンナへ謝罪した。

「トーヤが謝ることではないわ。あなたが二人を勧誘してくれたおかげで、こちらは大きな利益を得ているのだからね」

「ですが……」

「彼女の気質をしっかりとコントロールするのも、わたくしたち上司の仕事だもの。そして、そのコントロールのために、今日は一日トーヤの力を借りたいてところかしら」

ジェンナはそう口にするお茶目なウインクをしながら話してくれる。

「レミからトーヤが話していた魔導具について説明を受けたわ。わたくしも使ってみようと思った

し、お願いできないかしら？」

そして、最後には自分も使いたいのだと言ってくれた。

もしかすると、トーヤをやる気にさせるための方便かもしれない。

だとしても、そんなジェンナの期待に応えたいという想いの方がトーヤは強かった。

「もちろんです！ それに、私が口にしたことから始まったことですし、最後まで助言させていただきます！」

「助かるわ。ありがとう」

その後、トーヤは鑑定カウンターの準備を終わらせると、フェリが出勤したタイミングで事情を説明する。

「——というわけで、今日は一日、魔導具開発部で仕事をするようになりました」

「分かったわ。それにしてもすごいよね、トーヤ君って」

説明を受けたフェリはすぐに快諾かいだくすると、そのままトーヤに感心しながら呟いた。

「すごいって、何がでしょうか？」

「鑑定、計算、他にも色々私たちの手伝いをしながら、魔導具開発にも助言がきちやうだななんて、本当にすごいよ！」

「いや、私がすごいと言うよりは、先達せんだうがすごいと言いますか……」

アリアナやレミとのやり取りでも思ったことだが、トーヤの知識は、彼自身が生み出したものではない。

日本だけではなく、地球という世界で開発され、改良され、人間が当たり前のように使っていた文明の力なのだ。

だからだろう、自分が褒められることに罪悪感があり、素直に喜べなかった。

「だけど、トーヤ君がいなかったら、アリアナさんたちはどんな魔導具を開発しようか、今も悩んでいたかもしれないでしょう？ それはやっぱり、トーヤ君のすごさだと思うな」

「……フェリ先輩も、アリアナさんやレミさんと同じようなことを仰るんですね」

トーヤは思わず、呟いていた。

「それはそうだよ！ だって、本当のことだよ！」

そう口にしたフェリは、満面の笑みを浮かべていた。

こういう理由であれ、トーヤがきっかけを作ったのであれば、それはトーヤの功績なのだとフェリは語る。

それを素直に受け入れる自信が、今のトーヤにはまだなかったが、それでも彼が抱く申し訳なさは少しだけ和らいだ。

「……そうですね。ありがとうございます、フェリ先輩」

「私は思ったことを伝えたただだよ。それじゃあ、魔導具開発部でのお仕事も頑張ってね！」
「はい！」

フェリからエールをもらい、トーヤは元気づく返事をする。
そして、魔導具開発部へ向かった。

自分にできることは助言と鑑定だと心の中で言い聞かせ、小さく息を吐く。
(なるべく早くドライヤーを形にして、鑑定カウンターへ戻れるようにしなくてはいいですね)
自分がやるべきことを明確にしたトーヤは、魔導具開発部の扉を開いた。

「おおっ！ 待っていたぞ、トーヤ少年！」

扉を開いた途端、アリアナが歓喜の声を上げた。

「お待たせいたしました、アリアナさん。レミさんも、おはようございます」

「おはようございます、トーヤさん。ふあああ……」

元気なアリアナとは違い、レミはどこか眠たそうだ。

アリアナに付き合われて夜遅くまでドライヤーの話し合いをしていたのだろう。

その様子を見て、トーヤはレミに頭を下げる。

「私のせいで、アリアナさんに付き合わされたのではないですか？ 申し訳ございませんでした」

「うん、いいんですよ。これが私の仕事でもありますからね」

「ちょっと、レミちゃん！ 私に付き合うことが仕事って、どういことだい！」

レミの発言を受けたアリアナが抗議するも、トーヤは気にすることなく話を進めていく。

「今日はドライヤーについてお話するため、ジェンナ様からも許可をいただき、丸一日こちらへお邪魔いたします」

「そうなのかい！ それは嬉しい話だね！」

すると、アリアナは思考はすぐに切り替え、笑顔で答えた。

しかし、レミは心配そうな表情をしている。

「でも、鑑定カウンターは大丈夫なんですか？」

「そちらはフェリ先輩にお任せいたします。鑑定が無理なものは明日に回してくれるそうです」

トーヤは笑顔で答えると、アリアナは満足げな様子だ。

「ふっふっふー！ 私の魔導具が、ギルドの助けになっているということだね！ いやー、嬉しい限りだよ！」

アリアナは喜んでいるが、レミは申し訳なさそうな表情のままだ。

とはいえ、これはギルドマスターであるジェンナの決定なので、トーヤがどうこうできることはない。

そのため、トーヤは明るい口調でレミに告げる。

「レミさんが気にすることではありませんよ。それに、気にしてただけるのでしたら、なるべく早く魔導具を完成させてしましましょう！」

「……そうですね。ありがとうございます、トーヤさん」

「よし！ そうと決まれば早速、ドライヤー第一号を見てもらおうか！」

「……え？ だ、第一号？」

トーヤの中では、これからドライヤーを作り上げるために相談していく、という流れを予定していた。

しかしアリアナの口からは「ドライヤー第一号」と発せられた。

トーヤには、既にある程度の形ができてると聞こえたのだ。

まだ一日しか経っていないのにも思いつつ、トーヤは確かめるように尋ねる。

「……もしかして、既にある程度は出来上がっているのですか？」

「もちろんだとも！ とはいえ、安全確認などはまだだね！」

楽しそうなアリアナとは異なり、トーヤは驚きのあまり何も言えなくなってしまう。

「さあ、トーヤ少年！ 早速見てくれないかね！ さあ、さあ！」

そう口にしたアリアナは、トーヤの後ろに回り、彼の背中を押して奥へと進む。

奥のテーブルには布を被せられた何かがある。

これがドライヤーなのだと容易に想像がついた。

「では、いくぞ？ これが私とレミちゃん作り出した、ドライヤー第一号なのだよ！」

アリアナが勢いよく布を外すと、そこにはまごうことなき前世の形にそっくりなドライヤーが置かれていた。

「……なんと……□頭（かぶ）でしかお伝えしていなかったのに、これはまさしくドライヤーそのものではないですか！」

「そうだろう！ とはいえ、見た目はまだ武骨な状態だから、ここからデザインは洗練（せんれん）させなければならぬがね！」

「だとしてもすごいですよ……そ、それじゃあ、すぐに鑑定してみますね！」

今回ばかりはトーヤも興奮を隠すことができず、すぐにドライヤーの鑑定を始める。

トーヤが現在所有している鑑定スキル『聖者の瞳』（せいしやのひとみ）であれば、魔導具の完成度を細かく鑑定することが出来るのだ。

スキルを使用すると、トーヤも驚きの完成度が表示された。

「完成度は……おお！ 九九パーセントと出ましたよ！」

「九九パーセントだって!? こ、今度こそは完璧だと思っていたのにいいいいっ!!」

トーヤとしてはその高さに思わず驚いてしまうような数字だったのだが、アリアナからすれば悔

しさが爆発する数字だった。

すると、レミがアリアナをフォローする。

「一回目で九九パーセントですよ！ 喜ばしい結果じゃないですか！」

「そうだけでも、レミちゃん！ 私は完璧を目指していたのだよおおおっ!?」

頭を掻きむしっているアリアナを横目に、トーヤは何がいけなかったのか、ドライヤーの鑑定結果に目を向けていた。

（うーん……私から見ても、これは完成と言っても問題はなさそうなのですが……おや？）

鑑定結果を見ても機能の問題は見つからない。トーヤはどうしてこれが完璧ではないのか首を傾げていた。

しかし、その原因を見つけると、トーヤは苦笑いしてしまう。

「ど、どうしたのだ、トーヤ少年!!」

そんなトーヤの表情を見ていたのか、アリアナが顔をグイッと寄せながら聞いてきた。

「失礼いたしました、アリアナさん。こちらは完璧に完成と言っているかと思えます」

「ほ、本当かね、トーヤ少年！」

トーヤの言葉に嬉しそうな声を上げたアリアナだったが、そこへレミが疑問を口にする。

「でも、どうして最初は九九パーセントと言ったんですか？」

鑑定結果は間違いなく九九パーセントと表示されていた。

ならば、その原因があるはずなのだが、トーヤは完璧だと口にする。

レミにとつてはそれが気になっていた。

「どうやら、私に原因があったようなのです」

「トーヤさんに？」

「私のドライヤーの知識には、標準の機能以外にも、様々な機能が付いたものがありました。そのせいもあって、九九パーセントと出てしまっていたようなのです」

レミの質問に答えたトーヤだったが、その答えは二人の興味をそそるものになってしまった。

「様々な機能だ?!」

「それはいったいどのようなものですか!？」

「あ……ま、まずはこちらのデザインを整えて、完璧に仕上げてみてはどうでしょうか！」

まさかここまで食いつかれるとは思わず、トーヤは慌てて最初のドライヤーを完璧に仕上げようと口にした。

（様々な機能があるのは知っておりますが、それをどのようにして再現するのか、それはさすがに分かりません。答えられないことは、言わないに越したことはありませんからね）

自分の失敗だと理解しつつも、どうにか誤魔化そうとするトーヤ。

「ふむ。確かにその通りだね。魔導具師として、まずは最初の一つを完璧にしなければ！」

「ですが、トーヤさん！こちらが完成したら、色々と教えてくださいね！」

「……ぜ、善処、いたします」

苦笑いを浮かべながら答えたトーヤは、ドライヤーのデザインをどうするべきかと話し合うリアナとレミを見つめていたのだった。

ドライヤー第一号が予想外にほぼ完璧な仕上がりになっていたからか、トーヤは特にやる事がなかった。

そのため、昼休憩はレミと一緒に入ることになった。

「リアナさんは本当に一緒にやなくてよかったのでしょうか？」

そう呟いたのはトーヤだ。

魔導具開発部の場合、誰か客がやってくるということはないので、部屋を完全に空けてしまっても問題はない。

なのでトーヤはリアナも休憩に誘ったのだが、彼女は聞く耳を持たなかった。

「リアナさんの悪い癖が出てしまいましたね」

苦笑しながらレミはなんでもないように口にした。

だが、トーヤとしては問題になるのではと思っている。

（休憩に入っていないことがジェンナ様に知られたら、ものすごく怒られそうですけどね）

そんなことを考えながらカウンター裏に移動するトーヤとレミ。

「よっ！」

するとそこへ、友人であり、共に商業ギルドで働く仲間でもあるアグリが声を掛けてきた。

「お疲れ様です、アグリ君」

「お、お疲れ様です！」

トーヤがいつも通りに挨拶をすると、続けてレミがやや緊張した様子で口を開く。

あまり関わりのないアグリに驚いたのだ。

しかし、アグリはそのことには気づかず、トーヤに話し掛ける。

「なあなあ、トーヤ！今日は魔導具の開発をしてるんだろ？どんな感じなんだ？」

トーヤとレミは机を挟んで向かい合って座っていた。

そんなトーヤの横に腰掛けたアグリは、弁当を広げながら問い掛けた。

「女性の髪を乾かす魔導具を考えています。私やアグリ君には、必要ないものかもしれませんが」

「そうなのか？でも、姉ちゃんもばやいてたかも。髪が早く乾いてくれたら、すぐに寝られるのにーって」

アリアナやレミ、ジェンナからの意見は聞いていたが、まさかフェリも髪を乾かすことに難儀していたとは知らず、トーヤは驚きの表情を浮かべる。

「女性なら誰もが思うことだと思いますよ」

そこへレミが口を開くと、トーヤとアグリは彼女を見る。

「そうなのか？ あ、いや……ですか？」

年上の相手にため口で話し掛けてしまったアグリは、すぐに言い直す。

しかしレミは笑いながら、普段通りにしてほしいと答えた。

「気にしないでください。私の方が後輩ですし、普段通りで構いませんよ」

「そうか？ へへ、ありがとう！ んで、女性はみんなそうなのか？」

するとアグリは笑顔になって会話を続けた。

順応するのが早いなと感じつつ、トーヤもレミの答えが気になり耳を傾ける。

「そうだと思います。風邪の予防にもなりますし、濡れたままで寝てしまうと、翌朝起きた時の寝癖がすごかったり、大変なんです」

「寝癖は分かるかも！ 俺も髪が長かった時は、すげー寝ぐせで母ちゃんに見せたもんな！ まあ、

怒られちゃったけど」

「お、怒られてしまったんですね」

最後のオチを聞き、トーヤは苦笑いしながら口を開いた。

アグリは不満そうに話を続ける。

「このまま外に出るつもりかー！ って言われた！ んなわけないのにさー」

「お母さんからすると、アグリさんが周りから笑われないようにしたかったんでしょね」

レミの言葉にアグリは答える。

「そうなのかなー？ ……まあ、今はもう関係ないか！ それよりも魔導具だよ！ それ、できたら教えてくれよ！ 姉ちゃんにも使わせてあげたいんだ！」

アグリは気軽にそう言うが、魔導具は高価なものだ。

そのことを思い出し、トーヤはやや渋面になりながら口を開く。

「アグリ君。実は魔導具って、とても高価なものなのです」

「あつ！ トーヤ、俺が魔導具を高価だって知らないと思っただろう！」

「……知っているのですか!?」

驚きの声を上げたトーヤに、アグリはやや怒った風を装いながら反論する。

「当然だろうが！ バカにしすぎだからな、トーヤは！」

「も、申し訳ございませんでした」

しゅんとしてしまったトーヤを横目に見ながら、アグリは小さく息を吐く。

「……はあ。トーヤは本気で受け取りすぎ！」

「……え？」

「これくらいで俺が本当に怒るわけないだろうが！」

快活な笑みを浮かべながらアグリがそう口にするのと、トーヤは瞬きを繰り返し、最終的には安堵の息を吐く。

「……はあああああ。あ、ありがとうございます、アグリ君」

「俺とお前の仲だろうが！」

そう口にしたアグリは、トーヤの肩に腕を回した。

トーヤも笑顔になり、そんな二人をレミが微笑ましく見守っている。

「お二人はとても仲が良いんですね」

「おう！ 俺とトーヤは親友だからな！ いいや、大親友だ！」

「確かに、アグリ君の仰る通りですね」

レミの言葉にアグリが胸を張りながら答えた。

その言葉を聞き、嬉しそうに頷くトーヤ。

トーヤはアグリのことを親友だと思っていたが、お互いに同じ思いだったと分かり、それが嬉しかった。

「ですが、アグリさん。話を戻すようであれですけど、魔導具は本当に高価なものですよ？ どうされるおつもりなんですか？」

レミが改めて魔導具の値段について口にするのと、アグリは笑いながら答える。

「働いて貯めてるお金は使っていないからな！ まあ、なんとかなるって！」

「な、なんとかって……」

これがアグリだなと思いつながらも、トーヤは彼にはもっと計画的にお金を使ってほしいとも思ってしまった。

特にアグリはフェリのために魔導具を買いたいと思っているのだから、このような考えなしに魔導具を購入してプレゼントとされても、フェリは喜ばないのではないかと思ったのだ。

そう思い、トーヤはやりわりとした口調でアグリに告げる。

「きちんとお金のことも考えて購入した方が、フェリ先輩も喜ぶのではないですか？」

「あー……まあ、姉ちゃんってお金に厳しいからな」

「そうだと分かっているなら、なおのこと計画的にお金を使わないといけませんね」

「……分かった！ それじゃあ、完成していくらになるか分かったら、教えてくれよな！」

アグリも納得してくれたようで、完成したら金額を教えてほしいと元氣よく口にした。

ここで休憩時間は終わり、トーヤたちは仕事に戻っていく。

トーヤとレミは魔導具開発部へ向かい、アグリは会計作業だ。

しかし、魔導具開発部に二人がたどり着くと、そこでは予想外の出来事が起きていた。

「ちょっと、アリアナ！ あなたはなんで休憩に行っていないの！」

「いや、その、魔導具がそろそろ完成間近でして、ここで手を止めては——」

そう、ジェンナがアリアナに怒っていたのだ。

ジェンナは語気を荒らげながら、アリアナに詰め寄る。

「これ以上手間を取らせるようであれば、しばらくの間魔導具の開発を止めてもらおうわよ！」

「そ、それだけはお断り！ さ、早速休憩に行ってきます！」

慌ててそう口にしたアリアナは、魔導具開発部を飛び出していた。

「全く、あの人は……あら、トーヤにレミじゃない。休憩は終わったの？」

頭を抱えながら声を掛けてくれたジェンナに、二人は苦笑しながら頷く。

「終わりました」

「トーヤさんが声を掛けてくれたんですが、言うことを聞いてくれなくて」

「あの性格ですもの、仕方がないわ。アリアナが休憩に行ったのだから、二人はできることをやっていてちょうだいね」

そう口にしたジェンナは笑顔に戻り、そのまま魔導具開発部をあとする。

残されたトーヤとレミは、ドライヤーのデザインを考えながら、アリアナが戻ってくるのを待つことにした。

——そうして、一時間後。

「いやー！ 参ったねー！」

頭を掻きながら、アリアナが苦笑しつつ戻ってきた。

「アリアナさん。これを機に、きちんと休憩に入ってくださいね？」

「もちろんだとも、トーヤ少年！ 任せてくれたまえ！」

「休憩を取るのとは当たり前ですよ、アリアナさん！ 私は恥ずかしいです！」

顔を覆いながらレミがそう口にする、アリアナは慌てて彼女へ駆け寄る。

「す、すまないね、レミちゃん！ これからはちゃんと休憩に入るから！ ね？」

アリアナはレミが泣いてしまったのではないかと慌てていたのだが、実はそうではない。

今後と同じようなことが起きないように、トーヤとレミで一芝居打ってみようと考えたのだ。

（上手くいきましたね、トーヤさん！）

アリアナに見えないように、レミは横目でトーヤを見ながら、そんなことを考えていた。

「もしもアリアナさんが休憩に入らなかつたら、私からジェンナ様に報告しますからね」